1980年代における中国の日本文学翻訳

—— 季刊誌『日本文学』を中心として

Zhisong WANG (王志松 : Professor of · Beijing Normal University)

✉ wangzs@bnu.edu.cn

(中国) 北京師範大学外国言語文学学院日文学系教授。日本近現代文学、中日比較文学研究。『小説翻訳と文化構築——中日比較文学研究を視野として』(北京：清華大学出版社 2011)、『20世紀日本マルクス文芸理論研究』(北京：北京大学出版社 2012) など。

The Translation of Japanese Literature in 1980s China

: Focusing on the Quarterly Magazine *Japanese Literature*

Japanese Literature was a quarterly magazine that was launched in 1982, which had a total of 26 issues published before its closure in 1988. Based on an expansive understanding of Realism and the goal of emancipating the mind, the magazine published Chinese translations of the work of a group of Japanese writers who had been long marginalized. In this way, it promoted diversity in the field of literature. However, its Pan-Realism suffered from the defect of tending to cause misunderstandings of texts, which undermined the magazine's mission. There were also management problems, all of which led the magazine to the hasty choice of lowering its standards and consequently to its ultimate fate, that of failure.

Keywords *Japanese Literature*(『日本文学』), Magazine(雑誌), Translation(翻訳), Realism(写実主義), Popularity(大衆性)

季刊誌『日本文学』は、1982年創刊され、1988年終刊まで合わせて26期発行された。当誌は、中国で日本文学の翻訳と研究を旨とする専門誌であり、発行七年間掲載した翻訳作品数が300以上にものぼっており、1980年代の日本文学紹介において極めて重要な位置を占めると言えよう。この時期は、ちょうど文化大革命以後の思想解放と急速な市場経済の導入によって中国の文学観念が大きな変化を遂げていた期間であった。当誌は日本文学作品の大量翻訳と紹介でこうした思想解放の一翼を担ったのであるが、具体的にどのようにしてどの作家と作品が紹介されたのかは、まだ不明である。また、雑誌の運営は市場経済活動の一部分となったため、体系的に日本文学を紹介しようとした訳者や研究者たちの計画とどのような関係なのか、留意すべき問題点である。本稿は、当誌の翻訳作品をめぐる訳者の言葉、編者附記、評論などを手がかりとして、以上の問題を考察してみたい。

1 創刊の経緯

『日本文学』の創刊について、東北師範大学の劉春英は次のように回想している。

1981年秋、呂元明先生は吉林人民出版社と『日本文学』の出版に関する覚書をサインした。(略)双方は『日本文学』を日文学研究会の機関誌として発行する可能性についても話し合ったが、出版社側は、日文学研究会が出資するならこのような可能性も考えられるが、そうでなければ出版社としてこの話に乗りたくないと言った。出版社は、全額出資で雑誌の経営をし、呂元明をはじめとした東北師範大学日文学研究室は編輯を担当するという腹であったろう¹。

この回想から、当誌は東北師範大学の呂元明教授が提案して創刊されたことがわかる。雑誌の奥付には編集長の名前が明記されていないが、編輯が大抵呂の指導の下で行われていたのである。文革以後、1970年末から外国文化の紹介がブームとなり、日本文学も古典から現代の大衆文学まで幅広く翻訳されていた。単行本の外に『日本語学習と研究』、『外国文芸』、『世界文学』、『訳林』、『当代外国文学』等の雑誌も日本文学の翻訳作品を多く発表していた。しかし、全体的に見れば訳文の質はばらつきで、研究の基礎もまだ弱かった。このような状況について、呂元明は「まず、翻訳と紹介について体系性はなく、全国的な計画はない。基礎固めの視野が欠けている。一部の訳文は質が低くて読みづらいし、文学性も乏しい。次に、研究者と翻訳者はマルクス主義文芸理論をしっかり勉強し、文学的素養を高める必要がある。さもなければ、日本の評論家に追いつけず、独自の研究体系の形成が難しい。この点こそ極めて重要だ」と言っている²。呂は

¹ 劉春英「『日本文学』雑誌創刊始末」譚晶華主編『日文学研究 历史足迹与学术现状 日文学研究会三十周年纪念文集』（译林出版社，2010），p.49。

1979年成立された「中国日本文学研究会」の主な創立者の一人であり、副会長を担当していた。当時の翻訳の混乱状況を改善し、学会に研究発表の場を提供しようとしたことは、呂が雑誌の創刊を提案した主な動機ではないかと推測される。

呂元明は学会の人脈を通じて当時中国翻訳界と研究界の中堅を結集し、質の高い原稿を集めることに尽力した。創刊号が出るや中国読書界と学界で好評を得て、日本のジャーナリズムの注目も引き寄せたのである³。

創刊に当たって、吉林人民出版社がパートナーとして当誌の出版に参加した態度も留意すべきである。文革時代読者たちが長く読書に飢えていたため、1980年代になると外国文学の翻訳作品の売れ行きは非常に好調であった。そこに商機を見つけた吉林人民出版社は進んで『日本文学』の出版を引き受けたのである。しかし、論文発表を主とする学会誌なら読者がかかなり限定されてしまうことを心配して、学会誌の提案を断った。ここからうかがわれるように、呂元明をはじめとした研究者グループと出版社の間に、日本文学を翻訳する点で共通しているが、雑誌の運営方針について立場が異なっている。このような協力関係は雑誌の学術性と市場性を並立させながら矛盾を孕み、急遽終刊の遠因ともなったのである。

『日本文学』のもう一つの特色として、中日文化交流の懸け橋を担う使命感を自覚することが挙げられる。「創刊の言葉」は中日交流の歴史を振り返りながら、「難関を乗り越えた今日、中日はより友好な春を迎えた」⁴とした上で、次のように総括している。

我々は日本文学を学びたく参考にしたいと願い、中日の世代友好感情を抱いてこの文学の雑誌を出版したのである⁵。

1980年代、外国の国別文学を翻訳・研究する専門誌はほとんどなかった。イデオロギーから見れば、日本は資本主義であるため、日本文学を翻訳・研究する専門誌を創刊するなら、「文学」以外の理由が必要とされていた。「創刊の言葉」で繰り返された中日文化交流の懸け橋を果たす使命感の確認は、すなわち「文学」以外の、創刊根拠づけであったろう。改革開放のための外国資本誘致や冷戦構造への突破として位置付けられた中日友好は当時中国の国家戦略だったからである。

この特色は当誌の装幀や欄設置や翻訳作品の選択などからうかがわれる。表紙の「日本文学」という題字は中日友好協会会長廖承志の肉筆である。常設欄の一つである「中日文学交流」は、近代以降の中日文学交流の歴史を研究・紹介するものであり、創刊号に李芒の『中国における日本文学の研究と紹介』と東北師範大学外国問題研究所日本文学研究室

2 一鸥「记吕元明教授」(『日本文学』1983年2期), p.339.

3 刘春英「『日本文学』杂志创刊始末」, 谭晶华主编『日文学研究 历史足迹与学术现状 日文学研究会三十周年纪念文集』(译林出版社, 2010), p.50.

4 『日本文学』编辑部「创刊的话」(『日本文学』1982年1期), p.2.

5 上同。

編『五四運動以来日本文学研究と翻訳目録』が掲載されている。もう一つの常設欄である「随筆」は1950年代以前中日文学交流に従事した当事者の回想文章であり、創刊号に雷石楡の『私が日本で左翼詩歌運動に参加した日々』と任鈞の『翻訳仕事の回想』が発表されている。「訪問記」などの欄は当代中日文学交流に貢献した学者や作家に対するインタビューを掲載している。このような欄設置などを通して、『日本文学』は中日文学交流の新しい一頁を描きつつあることになったのだとも言えよう。

2 創刊号の翻訳作品

創刊号に掲載された翻訳作品は、小説、現代詩、短歌と俳句と、体裁が多様のみならず、内容も細心に選択されたのである。

現代詩は、当時の日本プロレタリア作家中野重治の「私は月をながめ」、「浪」、「帝国ホテル」、「いよいよ今日から」である。社会的背景から見れば、創刊号に日本プロレタリア文学作品を掲載したことは主流のイデオロギーを擁護する立場を表明することになったわけである。もちろん、これらの詩自体はそれなりの歴史的価値と芸術性があることも否定できない。「浪」は全世界人民の団結意志を描き、『帝国ホテル』は帝国主義の腐敗を暴露し、『いよいよ今日から』は革命者の不屈な闘争意志を表現している⁶と紹介されている。

「小説名篇」欄には三篇の小説が掲載された。劉光宇訳『春鳥』⁷は国木田独歩の作品である。訳者は「国木田独歩の短篇小説は、日本近代社会平民生活の芸術的絵巻と言える。日本社会の暗黒をある程度暴き、社会下層人民の生活と苦しみを反映している。芸術技巧が比較的が高く、抒情性が強く、描写が細かく生き生きとしていて、文体が優美である」⁸と評価している。山川方夫の『夏の葬列』⁹(笑愚訳)について、「戦争の罪悪を暴き、エゴイズムを批判し、道徳性に富んでいる」と紹介されている¹⁰。

現代社会を描いた上述の作品とは違って、繆偉群訳『美濃浪人』は司馬遼太郎の歴史小説である。この作品は、「明治維新前夜日本社会内部で繰り広げられた革新派と保守派との壮絶な政治闘争」を描き、「日本の時代遅れで腐敗した封建統治と鎖国政策に対して強烈な不満を顕わにしている」。社会史観から見れば、資本主義社会は最終的に社会主義社会によって取って代るが、封建社会より進歩した歴史的段階であるとして、この作品は新興ブルジョア階級を謳歌した点で進歩的な歴史観を表していると、条件付けの評価を

⁶ 佚名「中野重治」(『日本文学』1982年1期), p.268.

⁷ 吳樹文訳の当作は『春風』(1980年2期)に発表されたことがある。

⁸ 佚名「国木田独歩」(『日本文学』1982年1期), p.280.

⁹ 山川方夫の「夏の葬列」は中日対照読物として、景文学の訳注によって『日語学習与研究』(1981年2期)に発表されたことがある。

¹⁰ 佚名「山川方夫」(『日本文学』1982年1期), p.107.

与えられている¹¹。改革に対する肯定も、また当時の中国で押し進められた改革開放政策への声援と捉えられないこともない。

創刊号に司馬遼太郎の作品を掲載したもう一つの原因は、中日友好交流に貢献した作家として評価されたことにあろう。作者について「1975年日本作家代表団のメンバーとして、司馬遼太郎は中国を訪問した。氏はまた中日関係史と中国の歴史に詳しい作家であり、小説『空海の風景』で中日友好関係の交流に貢献した空海の生涯を描き、1977年から中国歴史を題材とした『漢風楚雨』を発表し始めた」¹²と紹介されている。

創刊号のメインは、何といっても呉樹文訳『越前竹人形』と李明非訳『案山子』という二篇の小説、李思楽の評論『竹人形の涙——「越前竹人形」を評する』からなる「水上勉代表作特集」であった。なぜ多くの作家から選び抜いて水上勉を創刊号の特集としたのであろうか。

この問題を解決する手がかりとして、李思楽の評論『竹人形の涙——「越前竹人形」を評する』を見てみよう。李は水上勉文学の特徴を次の三つにまとめている。一つは、下層人民に同情し、資本主義社会を批判すること。二つは、氏の小説は地方景物描写に長けて、日本の民族性と習俗をよく表すこと。三つは、氏の小説は社会派推理小説を発展させたと同時に、純文学にストーリーと社会性をもたらしたこと¹³。この三つの特徴は、『越前竹人形』で典型的に現れているが、特に三点目が留意すべきである。

1980年代の初め頃、中国における日本文学翻訳では二つの大きな傾向が見られる。一つには、映画『追捕』（西村寿行『君よ、憤怒の川を渡れ』）と『人証』（森村誠一『人間の証明』）が中国で上映されるにともない、松本清張と森村誠一などの社会派推理小説翻訳のブームが起ってきた。二つには、日本文学史の重要な作品も翻訳されはじめた。「中国日本文学研究会」が後援となった編集部からすれば、創刊号に日本文学史上定評のある大家の作品を翻訳したほうがよいと考えたのであろうが、こうした作品の読者層が限られたため、出版社側は受け入れられなかろう。水上勉の作品なら純文学と推理小説に跨るため、双方にとって受け入れられる選択であるし、水上本人は日中文化交流協会常任理事で、数回中国を訪問した経歴もまた追加点になったのだろう。

実のところ、この年、『越前竹人形』訳は三つの版本も出たのである。三つの版本といっても全部呉樹文訳であった。外国文学出版社から出版された『水上勉選集』に『越前竹人形』が収録されている。『日本文学』創刊号に『越前竹人形』が掲載され、同月吉林人民出版社から単行本も刊行された。同じ出版社から同時に二つの訳本を出したのは、やや異例ではあるが、それなりの売れ高を見込んだ自信があったのであろう。雑誌に掲載された評論は、『越前竹人形』の芸術性と社会性を重視しているが、単行本の扉のあらすじは、息子が「父親生前の愛人である下層娼婦玉枝を娶る」というストーリーの奇抜さを強

¹¹ 佚名「司馬遼太郎」(『日本文学』1982年1期), p.326.

¹² 上同。

¹³ 李思楽「竹偶の泪——評<越前竹偶>」(『日本文学』1982年1期), pp.262-268.

調し、「一連の詐欺、一連の悲劇が続々と発生する」というプロットの複雑さを誇張したことに重きを置き、作品の通俗性を前面に押し出している¹⁴。このような宣伝の効果を奏したせいか、単行本の印刷数は73310冊で、遥かに『日本文学』と『水上勉選集』の印刷数の合計50000部を超えたのである。

3 「写実主義」と「ヒューマニズム」という批評戦略

『日本文学』はほとんど毎期特集と専号を出している。特集とは、たいていある作家の数篇の翻訳作品とその文学に関する評論からなる。創刊号の「水上勉代表作特集」の外に、「井上靖特集」(1982.2)、「芥川龍之介特集」(1982.2)、「松本清張特集」(1983.1)、「石川達三特集」(1983.2)、「唯美派特集」(1983.2)、「第三新人特集」(1983.3)、「山本有三特集」(1983.4)、「新思潮派特集」(1984.1)、「野間宏特集」(1984.3)、「田宮虎彦小説特集」(1984.4)、「有島武郎特集」(1985.1)、「菊池寛特集」(1985.2)、「金子光晴特集」(1985.3)、「井上ひさし特集」(1985.4)、「林芙美子特集」(1986.1)、「宮沢賢治特集」(1986.2)、「大岡昇平特集」(1986.3)、「城山三郎特集」(1986.4)、「黒井千次特集」(1987.1)、「石坂洋次郎特集」(1987.2)と、基本的に文学史上重要な作家が紹介されている。これは、おそらく呂元明の所謂体系的に日本文学を紹介しようとした計画の実現であろう。

しかし、やはりいくつかの留意点があった。まず、古典文学の特集がないこと。次に、石川達三や城山三郎などの名前があるのに夏目漱石の特集がないこと。さらに、プロレタリア文学について個別な作品の翻訳と紹介があるが、特集がないこと。これは、文学の評価というよりも主に出版事情と関係があるだろう。プロレタリア文学はさておくが、古典文学の読者が限定されているし、夏目漱石の翻訳作品は各出版社からすでに続々と出版されていたのである。それでも、なぜ石川達三や城山三郎などの文学を重点に紹介されたのだろうか。この点について、当時の批評観を考えるべきである。

文革後、文学の創作と研究は二つの方向を目指して大きな転換をしようとした。一つの方向は、文革の極端な左翼化から離れて文革前の写実主義の主流文学に戻ろうとしたこと。二つは、文革前の抑圧されていた非主流文学を肯定して、五四運動の「人間解放」の啓蒙文学との水脈を見つけ出してそれを復活させようとしたこと¹⁵。『日本文学』は、作家と作品を紹介する場合も、基本的にこの二つの流れを踏まえていたのである。

まず、写実主義による批評を見てみよう。「芥川龍之介特集」において、文潔若は「社会現実を反映した芥川の作品は、題材が頗る広い。彼は多くの小説で虐げられた小人物側に立って人を圧迫し暴威を振る舞う悪人を鞭撻する」と紹介している¹⁶。「田宮虎彦小

¹⁴ 水上勉「内容提要」吴树文译(『越前竹偶』吉林人民出版社, 1982), 扉頁。

¹⁵ 洪子诚『中国当代文学史修订版』(北京大学出版社, 2007), p.187。

¹⁶ 文洁若「芥川龙之介和他的创作」(『日本文学』1982年2期), pp.127-135。

説特集」において、卞立強は「戦争批判の思想がほぼすべての田宮虎彦の作品に浸透している」と指摘している¹⁷。「石川達三特集」において、金中は「彼の作品は大きく二つに分けられる。一つは、時弊を風刺し、社会の暗い裏を暴く社会小説である。もう一つは、日本社会の風俗人情を描写し、ある程度社会問題に触れた風俗小説である」と言っている¹⁸。

大衆文学を紹介する場合でも、やはり主に写実主義の角度から批評している。「松本清張特集」において、趙徳遠は「松本は正義感のある作家で、資本主義社会の病弊に対して、＜文学は即ち暴露である＞ことを自分の信条とする。松本清張はリアルに当代日本社会を再現し、多角度から資本主義の腐敗を暴露する。この意味においてこれらの作品は資本主義社会を認識するためのよい教材であると言える」と評価している¹⁹。「城山三郎特集」において、馬興国は「全体的に見れば城山三郎の経済小説は大抵写実主義の範疇に属し」企業の黒幕を暴露すると位置付けている²⁰。

次に「ヒューマニズム」による批評を見てみよう。「宮沢賢治特集」において、于長敏は「ヒューマニズムの強い影響で、彼は心から略奪する搾取者を憎み、貧困民衆に同情を寄せた」ため、今日でも日本で広く読まれているのだと評価している²¹。「菊池寛特集」において、卞鉄堅は「彼の創作した歴史小説は大抵『平凡人の物語』で、たまに大人物を描いても小人物とみなして、ヒューマニズムの精神を貫いている。まず、菊池寛の作品は封建主義に反対し、人間性を尊重し、ブルジョア階級の合理主義を追求するという鮮明なテーマを持っている」と言っている²²。「石坂洋次郎特集」において、石坂は「ヒューマニズムの立場から庶民の運命に関心し、弱い者に同情し、社会の暗部を暴露し、新旧意識の衝突を提示し、正義の力の勝利を謳歌する」と紹介されている²³。金子光晴や山本有三についての評価もほぼ同じである。

「ヒューマニズム」をめぐり、文芸界では1980年代論争を交わされたことがあり、ブルジョア思想の概念とされていたのである。したがって、批評家たちはこの概念を以て批評する場合限界の指摘も忘れないように努めていた。たとえば、宮沢賢治のヒューマニズムについて、「厳しい現実闘争の中で、彼は民衆の反抗を導くのではなく、忍耐や自己犠牲を主張したりするのは、彼の作品の限界である」とされている。菊池寛の人道主義も「現実に対して不満であるが、現実と伝統と決裂することを恐れた政治態度も含まれている」と指摘されている。薄国端は『有島武郎とその創作』で「有島武郎は白樺派より出発し、十四年の創作生涯で、ヒューマニズム、ニヒリズムを経て、社会主義の真

17 卞立強「戦争の批判者、女性の同情人——记日本优秀的现实主义作家田宫虎彦」(『日本文学』1984年4期), p.72.

18 金中「石川達三的创作」(『日本文学』1983年2期), pp.79-84.

19 赵徳远「日本当代现实主义作家——松本清张」(『日本文学』1983年1期), pp.103-107.

20 马兴国「略论城山三郎的经济小说」(『日本文学』1986年4期), pp.107-114.

21 于长敏「宫泽贤治及其作品浅析」(『日本文学』1986年2期), pp.86-92.

22 卞鉄堅「菊池寛特：试评菊池寛大正年代的作品」(『日本文学』1985年2期), pp.70-76.

23 沈迪中「庶民作家石坂洋次郎」(『日本文学』1987年2期), p.101.

理を認識するに至った」と言っている²⁴。

このようにしてヒューマニズムよりも社会主義思想がより高く評価されていることがわかる。しかし、前述したように、なぜか『日本文学』にはプロレタリア文学に関する特集がなかったのである。「小林多喜二専号」には記念文章が二篇発表されたのみで、翻訳作品は掲載されなかった。もちろん小林多喜二の作品はすでに多く翻訳された事情もあるが、未翻訳の作品もあるし、代表作『蟹工船』は二つの訳があるがいずれも完訳ではなかったため、新しい訳本を出してもいいとも考えられるが、特集が欠如であった。文革直後、文芸界では社会主義を堅持するべきだと主張された一方では、文革中の極左翼思想をどのように清算したらよいか、という理論的な問題がまだ解決されていなかった。日本プロレタリア文学に限らず、中国の左翼文学をめぐる評価についても当時の文芸界では困惑していたため、プロレタリア文学の特集企画を避けたのであろう。

ヒューマニズムと関わって、「庶民」「大衆」「人民」などの概念を導入してそれまでの階級論的な評価基準を相対化しようとしていた。高烈夫は「林芙美子の作品は庶民の生活感情を後ろ盾として多少のニヒリズムの反抗精神も交じっている。(略)繊細な描写方法も加えて、広い読者を獲得したのである」と評価している²⁵。張春華は『井上ひさしとその小説世界』で「彼は基本的に人民の立場に立って社会底辺で生活している人民のために不平を鳴らしている。作品の主人公も弱い普通の人で、圧迫を受ける中で覚醒し、奮い立って自立する人物が多い」と言っている²⁶。

「写実主義」「ヒューマニズム」「庶民」「大衆」などの概念によって、それまで排斥されてきた作品を中国に紹介されるようになったことの意義は否定できない。ただしこのような批評戦略としての限界も見落とせない。たとえば、芥川龍之介文学について、資本主義への批判を強調しすぎた結果、人間性に対する追求への省察が欠けたのではなかろうか。松本清張の推理小説の社会批判を評価されたにとどまり、推理小説のレトリックと面白さを無視したため、結局推理小説への再評価にはつながらなかった。また、庶民性の重視で林芙美子の負うべき戦争責任も弁護したりした節さえ見られた²⁷。その中で、評論の内容と翻訳対象が最もずれたのは「唯美派特集」であった。

4 唯美派文学批評と翻訳のずれ

耽美派の作品は1920—1930年代多く中国語に翻訳され、中国の現代文学に大きな影響を与えていたのであるが、1950年代以降ブルジョア階級の腐敗的な没落文学として全部否定されてしまった。1980年代思想解放にしたがい唯美主義文学が再評価されてきた気

²⁴ 薄国端「有島武郎特輯—有島武郎及其創作」(『日本文学』1985年1期), p.90.

²⁵ 高烈夫「林芙美子及其小説」(『日本文学』1986年1期), pp.101-109.

²⁶ 張清華「井上厦及其小説世界」(『日本文学』1985年4期), p.135.

²⁷ 高烈夫「林芙美子及其小説」(『日本文学』1986年1期), p.107.

運の中で²⁸、『日本文学』も1983年第2期に「唯美派特集」を組んだ。翻訳作品は、永井荷風の『にぎり飯』(韩瑞穂訳)、谷崎潤一郎の『襤褸の光』(袁麗莉訳)と『麒麟』(趙樂鈺訳)、川端康成の『招魂節の一景』(陳真訳)と『禽獣』(葉渭渠訳)であった。

李芒は特集に附した『序言』で、ヨーロッパの起源から唯美主義の流れを説き起こし、その特色について次のように紹介している。唯美主義文学は大抵怪異な暗黒世界を背景にし、病態的な人工美を表現しようとして「芸術のための芸術」を主張し、非常識と退廃の態度で現実生活の倫理道德と習俗に反抗する。その結果、ある程度現実の中の醜と悪を暴露したが、往々にして見るに堪えない退廃派に墮落してしまったのである²⁹。

この特集で取り上げた三人の作家と作品について、李芒はさらに論評を続けていく。永井荷風に関して、『溼東綺談』を耽美派の代表作と認めたが、ただし遊郭の娼婦と作者の娼婦遊びを描いたものだとし、その内容と思想の不健康さを批判した。特集で翻訳した『にぎり飯』(1949)は、「侵略戦争が日本社会と人民にもたらした荒涼さと災難を描いた」作品であった³⁰。すなわち、永井荷風は日本の耽美派の代表作家であるが、特集で紹介されたのは氏の写実風の作品であった。

特集で翻訳された谷崎の『麒麟』と『襤褸の光』は、確かにいずれも耽美派の作品である。注目すべきは、李芒の批評方法であった。李は『麒麟』を創作の時代背景と結び付けて明治政府への批判を読み込んでいる。「この作品が発表されたのは甲午戦争と日露戦争の後である。以下の描写を通して読者は作者の意図がたやすく読み取れる。衛霊公が孔子に「富国強兵、天下を取る」方法を聞いたとき、孔子は「国家を傷つけ、人命を傷つける戦争や、民衆の富を搾取して富をはかる」ことについて何も触れないで、ただ軍事と財産と比べて、道德が一番重要であると力説しているのであった。そして力で諸国を服従させる霸道と仁を以て天下を取る王道の違いを説明し、公は王者の徳に慕い、まず私欲を克服すべきだ」として、小人を遠ざかり、その誘惑に惑わされないことを戒めている。そこには明治政府への批判が込められていると、李は説明している³¹。

『襤褸の光』について、李芒は「読者は作品を通して日本戦前の罪惡な社会が一般の人々にもたらした悲慘な運命を認識した」と、写実主義的な解説を試みたうえで、「(この作品は)人に汚物に接させ、美感を与えにくいので、何も『襤褸の光』を感じ取るはずはない」³²と、女乞食の惡臭と交じり合った美を徹底的に否定したのである。

「新感覚派」の川端康成をこの特集に取りあげた理由について、川端は耽美派ではないが、唯美主義の特色を持っているのだと、李は説明している。川端康成の文学につい

28 当時、中国文学史上の唯美作品も再評価される動きも出てきた。李思尔「闻一多是唯美主义诗人吗?」(《吉林师大学报》1979年3期)、邹平、蒋红「创作方法为什么就不能百花齐放?」(《复旦学报(社会科学版)》1980年1期)、刘钦伟「闻一多早期唯美主义述评」(《中国现代文学研究丛刊》1983年2期)などの論文がある。

29 李芒「唯美派特辑前言」(《日本文学》1983年2期), p.85.

30 上掲書, p.86.

31 上掲書, p.87.

32 上掲書, p.88.

て、現実離れで、縹緲たる幻境を求め、退廃、色情と虚無思想傾向を持っているとしながらも、感傷と懷古の情緒も強く、内容は基本的に清らかで、健康であると、肯定している。特集で翻訳した『招魂節の一景』は、サーカス女優の不幸な生活を描いたものであり、『禽獣』は人生の無常観と虚無的な感情を表したものであるため、思想では取るべきものはないが、芸術方法では見るべきものがあると結論付けている³³。

このような批評方法は、李芒独特のものではなかった。当時、欧米文学研究の専門家である伍蠡甫もほぼ同じ立場を持っているのであった。伍は『西方唯美主義の芸術批評』で唯美主義の芸術性を肯定するが、「醜に寓した美の「悪の花」はブルジョア階級の退廃生活や精神的危機を表現している。「悪の花」が客観的に存在している以上、このような作品は芸術的真實性も持っているはずである」と言っている³⁴。日本の耽美派文学について、唐月梅が『谷崎潤一郎』という文で下した次の評価も李芒の見解と通底している。「官能の陶醉の中で楽しみを求め、醜悪、退廃、怪異と恐怖の中で美の世界を探究する。マゾヒズムの中で精神的均衡を求め、伝統的観念と道德的価値に挑発し、資本主義社会に絶望、風刺と反抗を表している」と³⁵。

ただし留意すべきには、耽美派文学は李芒の批評ではほとんど否定されてしまったにもかかわらず、『日本文学』に掲載されたのである。伍蠡甫が唯美主義を容認する範囲を、「芸術が歌うのは、醜に勝つ美であり、醜を美とするものではない」としている³⁶。この点で言えば、『檻樓の光』の描写は明らかにこの容認範囲を超えてしまっている。

彼女の肉体には、乞食と云ふ種族に共通なあらゆる醜悪の下から、妙齡の女子に共通な艶冶な嬌態が、豊潤なる光沢を以て、輝かうとして居るのである。醜悪が艶美の効果を圧迫しようとし、醜悪が艶美の妨害に打ち克たうとして相責いで居る有様が、全身に溢れて居るのである。さうして、此の醜悪と艶美と常に絶え間なく相争ふ二つの力は、やがて互ひに混交し、混濁し、遂には全く発酵して、一種名状すべからざる色彩と、香氣とを放つに至つたのである³⁷。

この段落で叙述されたように、『檻樓の光』の乞食女性の形象は美と醜が融合していて、最後まで美は決して醜に勝つのではない。イデオロギーでは排除されるべき『檻樓の光』は、実は李芒の批判的な解読によってある程度清浄されたため、逆にその翻訳が

³³ 李芒『唯美派特輯前言』（『日本文学』1983年2期），pp.88-89.

³⁴ 伍蠡甫『西方唯美主義の藝術批評』（『文艺理論研究』1981年1期），p.33.

³⁵ 唐月梅『谷崎潤一郎』（『世界文学』1983年2期），p.184.

³⁶ 伍蠡甫『西方唯美主義の藝術批評』（『文艺理論研究』1981年1期），p.33.

³⁷ 谷崎潤一郎『谷崎潤一郎全集』（第5巻，中央公論社，1981），p.182. 袁麗莉訳は次の通りである。「在她的肉體里，乞丐這一類人物所具備的一切丑惡之下，有着妙齡女子所共同具有的妖艷嬌態，並以其丰潤的光澤顯示着魅力。丑惡企圖抑制艷美，而艷美則要戰勝丑惡之迫害，這種互相吞噬的情形溢滿她的全身。丑惡和艷美互爭不息的兩股力量，糾纏，混淆，終於完全融合，發酵，散發出一股難以名狀的色彩和馨香。」（『日本文学』1983年2期，p.114）.

可能になったのであろう。ついでに指摘するが、この作品はかなり忠実に翻訳されている。結果から見れば、四十何年も中断された日本の唯美主義の翻訳が再開されることになったのみならず、唯美主義に関する当時の中国学界の容認範囲をわずかながらも広げたのだと言えよう。

5 文学の大衆性と商品性

文学の大衆性は、『日本文学』の創刊から付き纏わされてきた主な問題の一つであった。それは、出版社が経営主体として利益を追求する現実的な必要性から出た問題であったと同時に、「中国日文学研究会」にとって解決すべき重要な文学理論問題でもあった。1950年代以降「文学の人民性」は中国文芸界における文学作品を批評する重要な基準となっている。「文学の人民性」とは、作者が人民の立場に立って創作すべきのみならず、作品が広く人民に広く読まれるべきだということも意味する。このような批評環境で、中国の日本文学研究界は、読者離れの、所謂「純文学」にやや批判的であるのに対し、多くの読者を擁する大衆文学に好意を抱いているのであった。ただし、日本の大衆文学は、中国の「人民文学」とは違って、社会主義的な価値観から逸脱した内容が多く含まれていて、不健康なものは少なくないとされていた。このような大衆文学をどのようにして評価すべきかは、研究者たちの頭を悩ませた理論問題であった。

この問題をめぐった思索について、李明非の『井上靖と井上文学』からその一端が覗かれる。

日本現代文学史上多くの文学流派があるが、文学史家はそれを純文学と大衆文学の二つの系統に分けている。井上靖は定評のある純文学の代表作家であるが、彼の全体的な創作を見れば、純文学を変革した代表作家と評するべきである。(中略)井上靖は純文学の特徴を堅持し、大衆文学の物語性と社会性を取り入れて、二者を溶かし、独特な「井上文学」を作りあげた。井上文学は純文学を作家の書斎から、庭園から解放し、純文学の発展の新しい方向を示している³⁸。

李明非は日本近現代文学を純文学と大衆文学に分けて、両者の長所と短所を指摘したうえで井上文学の特徴は「両者を溶かし」たところにあるとして、「文壇頂上にいる大師」だとして賛美を惜しまない³⁹。実は、中国で出版された日本文学史で井上靖は戦後の三大家の一人と位置付けられているのであった⁴⁰。すなわち、純文学と大衆文学の融合と

³⁸ 李明非在「井上靖及井上文学」(『日本文学』1982年2期), p.69.

³⁹ 上掲書, p.66.

⁴⁰ 叶渭渠は『20世紀日本文学史』(青島出版社, 2004年)で川端康成、井上靖、三島由紀夫を20世紀後半の日本文学三大家と併称している。

いうのは、井上靖一人の作家についての評価だけではなく、広く日本文学を評価する重要な基準となっている。

上述したように、水上勉についての評価も純文学と大衆文学の結びつきというところに置かれている。松本清張について、「彼は社会派推理小説を切り開いただけではなく、大衆文学のレベルアップと発展を促進し、写実主義創作でも傑出成果を収めた」⁴¹とやっている。沈廸中は『庶民作家石坂洋次郎』で「日本の純文学と大衆文学は対立しているが、それは実のところ文学の真善美の統一特性の破壊である。石坂洋次郎の作品は清新な主題で質朴、健康な情緒を現したため、すぐ読者の視線を集めた」と、評価している⁴²。

これらの評論において「人民」と「小市民」、「庶民」、「大衆」などの言葉が混用されている。李徳純は尾崎秀樹との対談『日本大衆文学について』で、このような言葉の意味を区別しようと試みた。

尾崎：大衆メディアはプラスもあればマイナスもある。プラスとは人民大衆に健康的なものを紹介する。しかし一旦商業化するとお金儲けになる。人民の文化素質を高めるのではなく、一部分の読者の不健康な趣味に迎合することになる。刺激性や色情になると、大衆情報伝播を壊滅にしてしまう。

李：中国では、開放政策について誤解した人もいた。外国作品を紹介するとき、お金儲けばかりを考えて、小市民の低級趣味に迎合したのは、まったく誤りである⁴³。

日本語で対話した時どんな用語が使われているかは分からないが、李徳純の翻訳では、「大衆」を「人民」と「小市民」に分けて、「人民」に積極的な意義を持たせるのに対し「小市民」は消極的だとしている。文学の大衆性は「人民」のためのものであるべきで、「小市民」の低級趣味に迎合すべきではない。健康な趣味のなかみについて、尾崎と李は必ずしも共通認識を得たわけではない。特に性に関する描写では、意見が分かれている。尾崎は戦後の「肉体派」は人間に対する新しい認識を示しているが、李は低級趣味として一蹴してしまったのである⁴⁴。

赤川次郎などの推理小説が翻訳されるにつれて、「社会派」に納められないものが出てきたため、「写実主義」を以て把握できなくなってきた。1986年2期に赤川の「上司不在の月曜日」が掲載された。「編者附記」では「現代商品は薄軽く小さい傾向がある。赤川次郎の作品はこのような現代的な特性を持っていて、時代感に富んでいる。内容から形式まで当代の青少年の口に合う」。「作品はユーモアの調子で、ストーリーが新奇で、場面

⁴¹ 赵德远「日本当代现实主义作家——松本清张」(『日本文学』1983年1期), p.103.

⁴² 沈廸中「庶民作家石坂洋次郎」(『日本文学』1987年2期), p.101.

⁴³ 尾崎秀樹和李徳純在「关于日本大众文学」(『日本文学』1986年3期), p.77.

⁴⁴ 上掲書, p.75.

の転換が早く、会話は簡潔で軽い。(中略)感動しなくてもいいが面白ければいい」と紹介され、その殆どの作品はベストセラーであることも強調されている⁴⁵。ここから、作品の社会性から、面白さとベストセラーを重視することへと翻訳紹介の動機が変化してきたことがうかがわれる。

『日本文学』は、「紙、印刷、発行などの費用が大幅に値上がったため、ほとんどの新聞社と雑誌社は経済的危機の脅威を受けている」中で、ついに1988年1期から運営方針を大きく転換をして、大衆文学の翻訳に集中させていった。出版社は、「これまでの基礎の上で積極的に改革に取り組み、さまざまな創新と突破を試みた。この期は日本流行小説特集を出す。今後探偵、愛情、サスペンス、推理小説特集などを企画していく」と、新しい方針を打ち出した⁴⁶。

大衆文学に傾斜した原因について、出版社は「『日本文学』の歩みを振り返ってみると、本誌は読者との審美観と比較的大きい隔たりがあることが分かった。長く日本文学圏内の読者と研究者の高尚な趣味に迎合しようとした傾向があった。これは高雅に見えたが、実はより多くの読者を失った」と反省している。新しい方針とは一口で言えば、読者の猟奇心理に迎合することに尽きる。なぜなら、出版社から見れば「雑誌に対する読者の態度は、それを評価する最重要な基準だ」⁴⁷からである。

1988年第1期から、それまでと一番大きな違いは、全部翻訳小説を掲載し、作家紹介や評論省いたことである。目次では作品タイトルの後の括弧に探偵小説、倫理道德小説、家庭生活小説、社会問題小説、哲理小説、ユーモア・サスペンス小説と分類されている。推理小説特集ではサスペンス推理小説、問題推理小説、感情推理小説、私推理小説、若い女性心理小説、夫婦生活小説などに分けられる。このようにして「サスペンス」「若い女性心理」「夫婦生活」などの刺激的な言葉によって、読者の目を引こうとしていたのである。

この点についてもう少し詳しく見ると、例えば島田一男原作、谷峪、王玲訳の『毒死丈夫の女人(短篇夫妻生活小説)』⁴⁸(1988年3期)と分類されている。作品のあらすじは次の通りである。ある男と女は、敗戦時満州から日本に引き上げるために、夫妻を装わずにはいられなかった。帰国後、女はヒロインに中毒した男に不満であるが、男は女の経済に頼るため、密かに入籍の手続きをした。女は男から逃れるために毒薬で男を殺すことに追いやられた。この小説には引き上げの社会的問題が含まれているし、人間の暗い心理も解剖されているため、「社会派推理小説」の本道を踏まえた作品だと評してもいいが、「夫婦生活小説」という奇妙な分類で、「性愛小説」へと連想を誘導してしまうのであろう。このような編輯手法で、李徳純がかつて批判した「小市民」の低級趣味に迎合する

45 孙立新「编者附记」(『日本文学』1986年第2期), p.230.

46 编辑部「当我们六年的时候」(『日本文学』1988年第1期), 扉頁.

47 编辑部「经营决策的重要依据——在尽责和求生双重压力下竞争」(『日本文学』1988年3期), 扉頁.

48 日本語の原作に関する情報はまだ不明である。

ためのものとなりさがってしまったのである。

『日本文学』はこうした一連の版面刷新を通して印刷数を伸ばしていった。奥付を見ると、1988年第1期は5万部であり、第2期は10万部へと倍増した。第3期は、さらに15万部と飛躍した。最後の増刊はやや印刷数が落ちたが、やはり10万部もあった。数字だけを見れば、雑誌の方針転換が大成功のように見えたが、なぜか突然休刊になってしまった。

休刊の原因としていろいろと考えられるが、一番大きな原因は実は無謀に印刷数を拡大したところにあるのではないかとと思われる。印刷数の拡大は実際に売れた部数の拡大を意味するのではなかった。

創刊から、『日本文学』を支えた柱が三つある。一つは、日本文学研究会の学術後援であること、二つは中日友好協会の看板であること、三つは出版社の運営であること。出版社は市場経済の圧力で利潤追求を最優先させて、他の二つの柱を排除してしまった。しかし、誤算もここにあった。まず、この雑誌は正規雑誌として登録されたのではなく、本を定期的に出版するという方法を取っているものであった。そのため、発行ルートが限定されて雑誌のように郵便局で取り次ぐのではなく新華書店のルートで販売されるため、定期的な購読者にとって購入は非常に不便であった。次に、外国文学翻訳市場の変化。1980年代の前半では外国文学翻訳作品なら10万以上発行したことがあるが、後半になると、テレビ、旅行などの普及に従って娯楽が多様化してきたので、出版業界全体が落ちこんできて多くの雑誌は休刊に追い込まれた。吉林人民出版社はこのような出版業界の危機を感じとって、生き延びようと変化を求めているが、読書情勢の判断を誤って、1988年の第2期から10万冊以上を印刷することに踏み切ったが、売り切れないことはほぼ確実で、大きな損害を出してしまったのであろう。この転換が他の二つの柱をなくした後の賭けであっただけ、目標が達成できなければ『日本文学』は休刊するしかないだろう。

6 結び

『日本文学』が発行された七年間は、ちょうど文革後の思想解放と市場経済の導入で激動的な時期であった。当誌は当時の文学観に制限された中で、「写実主義」と「ヒューマニズム」という批評戦略をもって、誤読がありながらも長く排斥されてきた多くの日本の作家と作品を中国に翻訳してきた。その結果、思想解放の一翼を担って、文学の多様化を促し、新しい文学観の形成に寄与したのだと評価できよう。

それと同時に、市場経済の波の中で、文学の大衆性、商品性という問題も突き付けられた。中国の日本文学研究界は、日本文学史の「純文学史観」とは違った、大衆文学を視野に入れた新しい批評基準を立てようと模索していたのであるが、写実主義にとらわれ

すぎて理論的な進展が見られなかった。批評の根本基準とされてきた「汎写実主義文学観」は、翻訳作品の範囲が広がるにつれて、作風の異なる作品を把握できない限界を露呈してしまった。そこで、経営難などの事情もあって、『日本文学』は安易な読者迎合方針に切り替えて挫折してしまった。

1980年代後半から、改革開放によって中国の社会環境が大きく変わり、都市化が急速に進展してきたため、人々の読書意識も変化した。日本文学翻訳について言えば、資本主義に対する批判から、都市で個人が如何に生きるかというテーマへと、読書趣味がひそかに移りかわりつつあった。その典型例は村上春樹文学翻訳の登場であった。興味深いことに、中国で村上春樹の翻訳作品が一番最初に掲載されたのは、実は『日本文学』1986年第2期であった⁴⁹。「編輯付記」では村上文学は高度に発達した当代の都市生活の空虚と寂寞、情報化社会における人間性の貧しさを表現したものとして、かなりの確にとらえられたのであった。また、文芸評論家前田愛、川本三郎が記号学の方法で村上文学を分析した情報も紹介された⁵⁰。ここで新しい角度から新しい方法論で「汎写実主義文学観」を突破しようとした契機が見られたが、残念なことに十分に受け止められないまま、最後に出版社の主導で奇異、色情の方向へ走ってしまった。

1988年『日本文学』の終刊と、その翌年の林少華訳『ノルウェーの森』の出版は、日本文学翻訳状況の変化を物語る象徴的な事件であった。その後、中国において村上文学ブームが二十年以上も続いていたのである。

付記 本稿はNSSFC「近代以来中日文学関係研究と文献整理(1870—2000)」(17ZDA2777)による研究成果の一部である。

参考文献(Bibliography)

- 『日本文学』(1982-1988), 長春: 吉林人民出版社. *Ribenwenxue*(1982-1988) Changchun: Jilinrenminchubanshe.
- 伍蠡甫(1981)「西方唯美主义的艺术批评」『文艺理论研究』1期, pp.23-33. Wu, Lipu(1981) Xifang weimeizhuyi de yishuping. *Wenyilun yanjiu* No. 1, pp.23-33.
- 叶渭渠(2004)『20世纪日本文学史』, 青島: 青島出版社. Ye, Weiqu(2004) *20shiji Ribenwenxueshi*. Qingdao: Qingdao chubanshe.
- 洪子诚(2007)『中国当代文学史修订版』, 北京: 北京大学出版社. Hong, Zicheng(2007) *Zhongguo dangdai wenxueshi xiudingban*. Beijing: beijingdaxue chubanshe.
- 刘春英(2010)『『日本文学』杂志创刊始末』, 谭晶华主编『日本文学研究 历史足迹与学术现状』, 南京: 译林出版社, pp.49-52. Liu, Chunying(2010) *Riben wenxue zazhi chuangan shimo*. Tan jinghua zhubian, *Riben wenxueyanjiu Lishizui yu xueshixianzhuang*. Nanjing: Yilin chubanshe, pp.49-52.

⁴⁹ 『日本文学』1986年2期に赖明珠译『村上春树小说三篇』(「街的幻影」, 「一九八四年超级市场式的生活」, 「镜子里的晚霞」, pp.182-191)、川本三郎作、赖明珠节译「都市的感受性」(pp.116-125, p.191)が掲載。

⁵⁰ 佚名「编者附记」(『日本文学』1986年2期), pp.190-191.